

# 悠久なる故郷の響き

——黄檗声明の中国的要素——

周 耘

## 研究の動機

もう何年も前のことになりますが、筆者は日中仏教音楽比較研究のため京都へ留学した時に、黄檗宗の大本山萬福寺へ訪れる機会がありました。黄檗宗は、日本の禅宗三派のうちのひとつです。初めて萬福寺を訪れた際、「不許葷酒入山門」（葷酒山門に入るを許さず）という漢語の刻まれた石碑が目にとまり、その瞬間、かすかな郷愁を覚えました。そして、これはどのような寺院なのだろうか、大陸の仏教寺院の雰囲気の色濃く感じられるのはなぜだろうか、とこの寺院の儀礼音楽に強い関心を抱きました。

その後、黄檗宗宗務総長の乾隆俊和尚、文華殿田中智誠和尚のご協力のもと、筆者は何度も萬福寺を訪れ、法要儀礼を現地調査させていただきました。この文章を借りて、乾和尚、田中和尚、そして萬福寺の皆様にご心よりお礼申し上げます。

## 1. 黄檗宗の歴史

### (1) 日本に伝わる珍しい禅寺

萬福寺は京都府宇治川のほとりにある寺院ですが、中国明朝の仏教寺院の建築様式で建てられています。そのため、奈良時代や平安時代初期に建てられた古風な寺院とも、またその後日本化された洗練された寺院とも異なります。木造の殿堂を主としたつくりで瓦の屋根がついた建物で、青々とした松と柏が美しく映えていました。殿堂が整然と並び、殿堂の名称を記した漢字が高々と掲げられ、また入口の両側には大きな柱があり、そこに漢詩が掲げられています。

萬福寺で行われる大小の法会に行きますと、中国の寺院で聞かれるような音に出会います。また、中国の寺院でよく見るような普茶料理や、中国式の寺院庭園など、寺院全体の至るところで中国の寺院のような風情が感じられます。故郷を異にする華人が入寺した際の喜びと慰めを数百年後に追体験しました。郷愁を感じさせられました。

## (2) 黄檗宗を創立した大陸の高僧

萬福寺を創建したのは、隠元隆琦という僧侶です。彼は1592年（万暦20年）に中国福建の、林という姓の名家に生まれました。29歳の時、福建の萬福寺で得度し、46歳の時、師である費隱通容から臨済宗の一派である楊枝派ようぎはの衣鉢を受け継ぎ、楊枝派の正統な継承者となりました。

その後、隠元は福建の黄檗山萬福寺の住職となり、1654年に、日本からの招きで教えをひろめるべく来日しました。来日にあたって、日本での滞在は3年とし、期限を迎えたら帰国して再び故郷の黄檗山に戻ってくるのが福建の萬福寺と取り交わした約束でした。

しかし、隠元は徳川幕府から京都に土地を賜り、そこに新しく寺院を建てて「黄檗山萬福寺」と命名しました。俗に京都の萬福寺を「新黄檗」と呼び、福建の萬福寺を「古黄檗」と呼びます。新黄檗は寺院建築から法要の式次第、僧侶の生活習慣に至るまで、明朝禅宗のやり方を規範としているため、日本人にとっては、異国情緒あふれる寺院となりました。こうして、隠元が日本で創立した黄檗宗は臨済宗、曹洞宗とともに日本の禅宗の三大流派となりました。

## 2. 黄檗声明の中国的要素

### (1) 臨済梵唄から黄檗声明へ

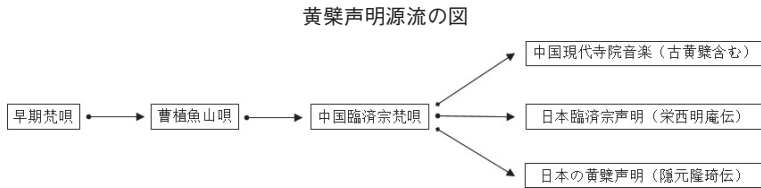
私の音楽学者としての関心は、自然と黄檗宗の儀礼音楽へ、そして声明の特徴に向けられました。そこで、ここからは黄檗声明の中国的要素とその現象について、社会的、歴史的文化要因に着目して分析を進めます。

仏教儀礼に用いられる音楽を、中国では梵唄ほんばいと呼び、日本では声明しょうみょうと呼びます。声明とは梵語（即ちサンスクリット語）の Sabda-vidyā を漢語に訳したもので、本来、古代インドの学問分野、五明（声、因、内、医、工）のひとつである文法および音韻学を指し示すものです。しかし、日本仏教の用語である声明は、仏教音楽を指します。この名称の変化は、日本の僧侶の知恵を反映しています。インドから来た梵唄は中国に伝わった後に中国化されていますので、中国から日本に伝わった仏教音楽を梵唄と呼ぶのはあまり適当ではありません。

中国の仏教音楽（梵唄）は隋唐代（奈良・平安時代）に大陸より日本へ伝来し、千年あまりの間に、天台声明、真言声明、臨済声明、曹洞声明、黄檗声明などを形成しました。

そのなかで、中国から日本へ最後に伝来した黄檗声明は、伝来して364年に

なります。そのため、日本化した部分もありますが、多くの中国的要素と明清  
 仏教音楽の名残を色濃く残しています。



## (2) 黄檗声明の中国音楽的要素

黄檗声明は日本的特徴と中国的要素の両方がみられます。時間に限りがありますので、ここでは、旋律に焦点をあてて説明します。

まず、日本の特徴として、都節音階を基礎とした旋律が挙げられます。これを私は和風旋律と呼んでいます。

【楽譜】和風旋律「潔壇浄水賛」

（萬福寺中元法要 周耘採譜）

都節音階は、隣り合う音の関係が短二度と長三度とからなる五音音階で、江戸時代の音楽によくみられる音階です。これが、黄檗声明に日本的な響きを加えています。

一方、黄檗声明にみられる中国的特徴の旋律を、筆者は中華風旋律と呼んでいます。

【楽譜】中華風旋律「拝懺」

（萬福寺中元法要 周耘採譜）

中華風旋律は中国の伝統的な五音音階を基礎とします。その特徴は、隣り合う音の関係が長二度と短三度からなる、半音を含まない五音音階です。黄檗声明の多くがこの音階を使用しており、中国的特徴といえます<sup>1</sup>。

### (3) 黄檗声明に見る明清仏教音楽の痕跡

次に、中国と日本で共通して伝承されている曲を比較してみましょう。

以下の譜例は、「三帰依」という曲です。前者は日本黄檗山萬福寺で唱えられている黄檗声明の「三帰依」で、後者は中国のある禅寺で唱えられている梵唄の「三帰依」です。

このふたつの譜例を比較すると、多くの共通点が見受けられます。中国の伝統的な五音音階で、旋律の形がよく似ており、リズムも緩やかで自由、清麗高雅な曲調です。

#### 【楽譜】「三帰依」二曲

三帰依（黄檗声明）

自 皈 依 佛 當 願 衆 生 體  
解 大 道 發 無 上 心  
(萬福寺中元法要 周耘採譜)

三帰依（天寧梵唄）

自 皈 依 佛 當 願  
衆 生 體 解 大 道 發 無 上 心  
(天寧寺水陸会 周耘採譜)

1 日本ではこの音階は律音階といい、よく使われています。律音階を陰旋化したのが都節音階と考えられています。おそらく、中国から梵唄を黄檗宗が取り入れたときに、日本の音楽にもある律音階と共通しているので、江戸時代の流行を取り入れて陰旋化しやすかったのではないかと思います。ちなみに、律音階は田舎節といわれる音階と使用音が共通しています。日本人の耳には律音階は田舎風、都節音階は都風に聞こえたからです。

これらの共通点は、明清時代の仏教音楽の痕跡です。この他にも、重複変化の旋律構造<sup>2</sup>、経文の唱え方とその内容、拍節やリズムの様式、「金属的」な音色を求める傾向、口頭伝承の方法など、様々な点で明清時代の仏教音楽の痕跡を見ることができます。

このように、黄檗声明は多くの中国的要素を継承していますが、いかにして、360余年もの間、中国的な要素を保つことができたのでしょうか。

### 3. 望郷の念と永遠の故郷の響き

#### (1) 郷愁が故郷の響きを留める

隠元は日本へ渡る際、3年で帰るという約束をしました。しかし、日本での布教が大成功したため、隠元は二度と帰ることはありませんでした。きっと、彼は、故郷やかつての仲間たちのことを、いつも思い、夢に見るほど恋しく思っていたでしょう。異国の地へたどり着いてから他郷（異郷）で入寂する日まで、隠元は故郷、福建の黄檗山萬福寺、すなわち古黄檗を忘れたことはありませんでした。

故郷を思うあまりにホームシックとなってしまった隠元が隠居して以降、隠元とともに日本へ渡来した数名の中国僧は「古黄檗」に伝わる規律を模して「黄檗清規」を制定しました。この制度をもって黄檗禅の純粋性と正統性を守ろうとただだけでなく、何代にもわたって黄檗禅僧が「古黄檗」への敬意と感謝を保ち続けるよう、願ったためです。

……老僧自甲午歲，于古黃檗受請東來，……辛醜蒙上賜地，  
重開黃檗。……老僧雖老朽無似，忝爲一代開山，不得不重立  
規制以曉後昆。……凡我後昆，宜遵我法。庶叢林不混，而祖  
道可振。（「黄檗黄檗清規・序」より）

こうして、隠元が宇治に寺院を建立して以降、第21代住職の大成照漢の時代まで、第14、16、17、19代を除くその他すべての住職は、いずれも「唐僧」と呼ばれる来日中国僧が住職を務め、黄檗宗の一大特色である黄檗禅の純粋性と正統性を形成してきたのです。また、住職だけでなく、大眉性善、東皋心越な

---

2 旋律を繰り返しながら少しずつ変わっていく、という意味です。

どの来日僧も大いに活躍し、黄檗宗の興隆に重要な貢献を果たしました。

非常に長い年月にわたって、黄檗宗の法要は中国の高僧を中心に行われました。異国に身を置く同郷の来日中国僧たちは、隠元が手塩にかけて作り上げた故郷の情緒溢れるこの寺院で、生活を共にすることで、異国での寂しさを乗り越え、精力と思慮のすべてを尽くして、黄檗宗の教えを守り、日本の萬福寺における中国的な特徴を保ってきたのです。

1723年を最後に中国僧の来日は途絶え、1784年に第21代住職大成照漢が入寂すると、日本の黄檗宗は中国僧を中心とした歴史に幕を閉じ、中国僧の姿は寺院から消えていきました。ここから、隠元の黄檗禅法と黄檗声明が固定化し、日本僧がそれを習わしとして勤めるようになったのです。

## (2) 高貴な僧侶が守り続けた故郷の音色

来日中国僧の郷愁や深い情緒が、黄檗声明に、明清時代の仏教音楽の痕跡を残しました。さらにその痕跡が残った理由には、隠元と黄檗宗が来日後、すぐに日本で高い地位を得たことで、社会的に認められ受け入れられたことも付け加えられるでしょう。その例をいくつか挙げます。

- ① 禅宗の正統的な継承者：隠元は、臨済宗の第32代目であり、既に中国で高僧大徳の地位を得ていた。
- ② 道俗二衆の至尊的な崇拜者：長崎で興福寺が開山し、布教が始まると、民衆数千人がその教えを聴聞しに訪れ、昼夜を問わず高僧隠元ちやうもんを参拝するために長い行列をつくった。また、高槻の普門寺では、日本人僧侶が続々とやってきて、隠元の仏様のような姿を拝謁し、感激して涙を流して喜んだという。
- ③ 幕府と朝廷による高い関心：隠元は、萬福寺を建立するために徳川家綱から土地を下賜されるほどの信頼を得ていたが、同時に後水尾法皇の信頼も得ていたため、入寂後には朝廷から「仏慈広鑑国師」「径山首出国師」「覚性円明国師」「真空大師」など多くの称号を与えられた。

このように、隠元の永遠の郷愁は変わらない故郷の音色を求め、彼の高い社会的地位によってその音色は守られたと言えるでしょう。

### (3) 江戸初期の伝来

黄檗宗は、日本伝統仏教の各宗派のなかでは最も遅れて中国大陸から日本に伝えられました。日本に伝来してからの期間が比較的短いので、中国仏教音楽の様式と風格をよりよく保存することができています。

黄檗宗：隠元が17世紀中頃に創立、1661年萬福寺を創建、約350年前。

曹洞宗：道元が13世紀中頃に創立、1243年福井に永平寺を創建、約800年前。

臨済宗：栄西が13世紀初めに創立、1202年京都に建仁寺を創建、約800年前。

このように、黄檗声明が明清時代の仏教音楽の特徴を色濃く伝え、黄檗宗が中国的要素を色濃く保つことができた要因は、複雑な要素が絡み合っており、単純ではありません。

## 4. 「郷に入れば郷に従え」響音の変容

### (1) 静かに万物を潤す——声明の日本化

黄檗宗の日本伝来から360余年の間、黄檗声明が全く変わることなく原型を保つことは不可能であり、次第に日本化し、最終的には日本の声明の一つとして位置づけられていったことは、自然な流れであったと言えます。「拝懺」という曲の譜面をご覧ください。

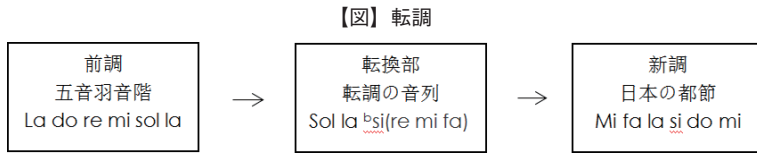
「拝懺」の前半で使用されているのは、中国の伝統的な五音音階で、転調後、都節音階が用いられています。第六小節が調の転換部にあたり、前の調に対して「sol<sup>b</sup> si<sup>b</sup> la」になっており、これが後続の調「re fa mi」にあたります。短二度を使用し、転調が速やかに行われています。

#### 【楽譜】「拝懺」

The musical score is written in G major (one sharp) and 4/4 time. It consists of three staves of music. The first staff contains measures 1 through 5. The second staff begins at measure 6 and contains measures 6 through 8. The third staff begins at measure 9 and contains measures 9 through 12, ending with a double bar line and the word 'Fine'.

(萬福寺中元法要 周耘采譜)

黄檗声明の類似の転調例を見てみると、いずれも、短二度音程を媒介の同主音として転調を行っています。



この例はいずれも、先行する調である中国の伝統五音音階の主音の上に、短二度音程を挿入することによって、「短二度+長三度」の旋法を絶え間なく強調し、都節音階への転調を可能にしています。転調の性質としては、中国風から和風への転換と言えます。

この転換のなかにある、抗うことのできない時間と空間の圧力には驚嘆の念を感じざるにはられません。そしてこの圧力のなかで転換を成し遂げた、黄檗禅僧の音楽的なテクニックをどのように賛美したらよいか言葉が見つかりません。中国風から和風へのこのような転換が行われ得たのは、熟練した技巧はもちろんのこと、黄檗禅僧が中国と日本の二つの音色への深い理解をもっていたからこそであり、そのような禅僧でなければ、この旋律が心の底から自然に流れ出ることもなかったでしょう。

## (2) 日本化を促した主な要因

- ① **時間的経過**：隠元が日本で開山して3世紀半、そして、日本僧を中心とする寺院運営から2世紀半が経ち、声明は時代とともに変遷を重ねてきました。
- ② **楽譜によらない口伝心授（口頭伝承）**：明清時代の仏教音楽は楽譜を用いませぬ。黄檗声明も楽譜を用いず、口伝心授（口頭伝承）で伝えられたために変化したと考えられます。
- ③ **日本に根付く独特の島国風土**：中国には「風土が人柄を育てる」ということわざがあります。日本と中国では風土が異なるために、そこで生まれた民族性や美意識も異なります。中華民族の美意識は「雄大かつ壮絶にて濃厚に奇艶でいる」ものと言えますが、日本民族の美意識は「静寂かつ淡白にして幽玄を極めている」と言えるもので、黄檗声明の日本化は美意識の違いを具現化していると言えます。



## まとめと考察

### (1) 永遠の郷音、変容する郷音

来日中国僧の郷愁と情緒によって、黄檗声明は、多くの中国的要素を継承し、明清の時代的特徴を色濃くもつ音色を生み出しました。その一方、日本の風土に融合した黄檗声明は日本化し、新たな日本の音色を生み出したのです。

黄檗声明の将来を考える時、永遠の故郷の音は「永遠」であり得るのか。変容するこの音は最終的にはどこへたどり着くのか。非常に興味深い問題です。

### (2) 大陸仏教音楽への恩返し

① 驚くほどの速さで進んだ中国における仏教音楽の世俗化：歴史上、仏教音楽の世俗化の歩みは一度も止まったことがないだろうと考えられますが、20世紀1950年代以降、中国大陸の仏教音楽が急速な世俗化の変遷を辿ったことは驚くべきことでして、現代の流行曲さえも寺院の儀式音楽として使われました。例一の仏曲「六字真言」はテレサ・テンが歌った流行歌「小城物語」のメロディーを採用しています。例二の仏曲「菩薩聖号」は大衆歌謡曲「蘇武牧羊」のメロディーを採用しています。

例一：仏楽曲「六字真言」と「小城故事」との比較

#### 【楽譜】「六字真言」



#### 【楽譜】「小城故事」



例二：仏楽曲「菩薩聖号」と歌謡曲「蘇武牧羊」との比較

【楽譜】「菩薩聖号」

南無 觀世音 菩薩。 南 無 (呀) 觀世音 菩薩 南 無  
觀 世 音 菩 薩。 南 無 觀 世 音 菩 薩。

【楽譜】「蘇武牧羊」

蘇武 留胡節不辱， 雪地又冰天， 窮愁十九年， 渴飲血， 飢吞毡，  
10 牧羊北海邊。 心存漢社稷， 旄落尤未還， 歷經難中  
17 難 心如鐵石 堅， 夜坐塞上 時間笛聲 入耳痛心酸。

上記の例をみると、現代の中国において、仏教音楽の世俗化が日に日に増していることがわかります。

② 有識者による「古質」の復興：仏教音楽は音楽芸術であり、また仏教儀礼の一要素でもあり、仏教文化を構成するものであると言えます。中国における仏教音楽の急速な世俗化は学術界の注目を集めています。仏教界を悩ませる種でもあります。このようななか、有識者らは梵唄の古い特徴の復元の必要性を訴えています。そもそも、梵唄の古い特徴とは一体どのようなものでしょうか。黄檗声明と日本の伝統的な仏教各宗に伝わる声明が、その問題を考える際に大きな手がかりとなると筆者は考えます。

(しゅう うん 中国・武漢音楽学院 教授)